全国の園長先生に無料でお届けしています

2019 春 Spring

子どものよりよい育ちをともに考える
ベネッセの情報誌

これからの幼児教育

PDF 版では表紙写真を公開しておりません。ご了承ください。

特集

次の保育につながる「記録」とは？

聖心女子大学 現代教養学部 教育学科 教授 河邉貴子
東京学芸大学附属幼稚園 小金井園舎（東京都・国立）
さくら保育園（京都府・私立）

データ

読み聞かせの実態と言葉の発達 ── 幼児期から小学生の家庭教育調査 ──

ベネッセ教育総合研究所 https://berd.benesse.jp/

これからの幼児教育 春 2019 Spring

CONTENTS

1

特集

次の保育につながる「記録」とは？

18

データから見る幼児教育

読み聞かせの実態と言葉の発達
――幼児期から小学生の家庭教育調査――

目白大学 人間学部 子ども学科 准教授
荒牧美佐子先生

本誌をお手に取っていただき、ありがとうございます。

今号の特集では、「記録」を保育の質向上につなげていくために、単なる解説や記入例にとどまらない考え方や実践例をご紹介しています。お役立ていただければ幸いです。

特集ではご紹介できませんでしたが、河邉貴子先生（P2～）の個人的な体験をまとめられた著書『河辺家のホスピス絵日記』（共著、聖公会出版・東京書籍）は、日々のできごとと心の動きを「記録」することの大切さや、個人の記録がやがてパブリックメモリーになっていくことなど、幼児教育に通底する「記録の力」を深く感じることができる１冊でした。

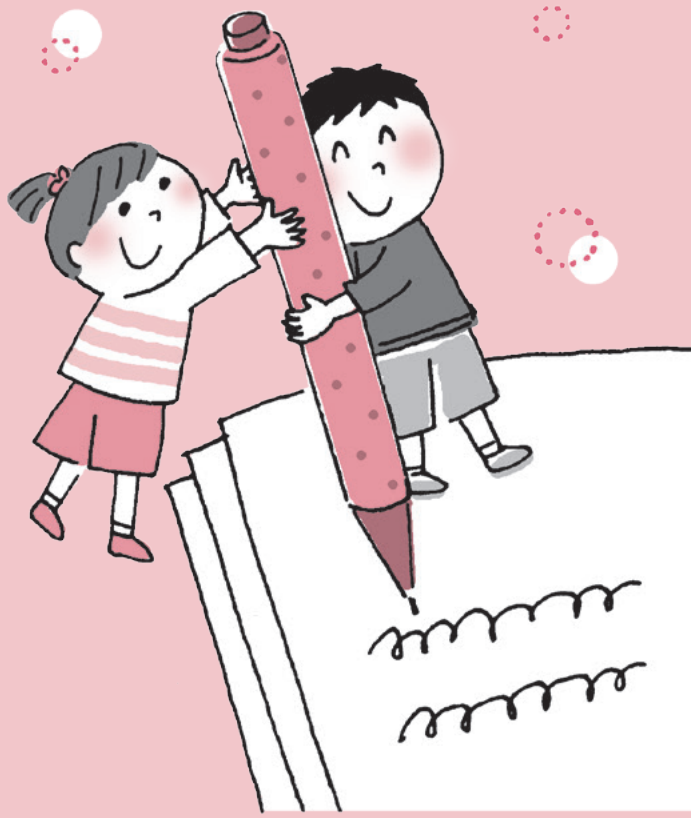
また、前号の新コーナー「幼児理解が深まった、あの頃、あの場面」がご好評いただいたため、今号でも各園の先生にお話ししていただきました。ぜひご覧ください。

『これからの幼児教育』編集部

「これからの幼児教育」2019年春号
編集発行人／岡田晴奈　発行所／（株）ベネッセコーポレーション
印刷製本／凸版印刷（株）
編集協力／（有）ペンダコ、丹羽三千代　執筆協力／二宮良太
撮影協力／ヤマグチイッキ、荒川潤、谷口哲　イラスト協力／アサヌマリカ

※本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。ここでご紹介した内容、デザインなどは変更になる場合があります。
※本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます。
©Benesse Corporation 2019

次の保育に



インタビュー P.2

「驚き」や「喜び」を記録し、子どもの育ちを読み取って次の援助につなげる

聖心女子大学
現代教養学部 教育学科
教授
河邉貴子先生

特集

つながる「記録」とは？

日々の保育記録は、保育者が一人ひとりの子どもの育ちを捉えた援助のあり方を考えるために欠かせないものです。多忙な中で「何を」「どのように」記録すれば、子ども理解が深まり、保育の質向上や保育者同士のノウハウの共有、さらには保育の面白さの再発見につながるのかを考えていきます。

事例 1　P. 6

「保育マップ型記録」を介して子どもの経験や思いを読み取る力を高める

東京学芸大学附属幼稚園
小金井園舎（東京都・国立）

幼児理解が深まった、あの頃、あの場面
東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎　3歳児クラス担任
町田理恵先生

事例 2　P. 12

めざす保育に合わせて記録様式と内容を改善子どもの育ちを丁寧に見取る

京都府舞鶴市社会福祉法人倉梯福祉会
さくら保育園（京都府・私立）

幼児理解が深まった、あの頃、あの場面
さくら保育園　5歳児クラス担任
岡山和史（かずふみ）先生

「驚き」や「喜び」を記録し、子どもの育ちを読み取って次の援助につなげる

聖心女子大学 現代教養学部 教育学科 教授 **河邉貴子先生**

かわべ・たかこ 主な研究テーマは、保育記録のあり方や遊び援助論。東京都公立幼稚園で 12 年間、教諭として幼児教育に携わった経験をもつ。中央教育審議会専門委員（初等中等教育分科会）などを歴任。著書に『保育記録の機能と役割』（聖公会出版）、共編著に『目指せ、保育記録の達人 !』（フレーベル館）など。

持続的な記録なしに保育の質は高まらない

記録の目的は連続した読み取りと保育者の自己省察

日頃から当然のように行っている保育記録の意味を改めて考えてみると、子ども理解を深め、次の保育を構想するために不可欠なもの、といえます（表1）。

子どもは、遊びの中でさまざまなことを学んでいきます。その特性を踏まえ、幼児教育は小学校以降の教育のように教えるべき内容をあらかじめ定めず、保育者が子どもの経験を読み取って次の保育につなげる「経験カリキュラム」をめざしています。子どもがその日の活動を楽しんだとしても、翌日の活動にその経験を生かした保育がなされなければ、そこに学びは生まれません。そのために、持続的な記録を通して日々変化する子どもの姿を丁寧に捉え、次の保育につなげることが求められるのです。

表1 保育記録の目的

- ◎幼児を理解する
- ◎幼児理解をもとに、次の保育を構想する
- ◎保育者のあり方を省察する
- ◎保育者同士が情報を共有する
- ◎保護者との連携に生かす

また、保育者が自身の保育を省察できることも、保育記録の重要な側面として挙げられます。保育は子どもとの相互作用の中で行われますから、子どもの姿を読み取って記録すれば、必然的に保育者自身の保育のあり方も振り返ることになります。

一回性のできごとの連続である保育を記録することで、情報共有も可能になります。保育者同士が共有したり、園内研修の材料としたりすれば、園全体の保育の質が高まるでしょう。最近では保護者との連携のために、保育記録をもとに子どもの育ちをわかりやすく伝えることも、いっそう大切になっています。

新しい幼稚園教育要領や保育所保育指針等でも、これまで同様に記録の重要性が強調されています。保育の現場でもそのことは共有され、多くの園が継続的な保育記録に取り組んでいます。一方で、保育者の多忙化などの要因で、記述がおざなりになったり形式的になったりして、記録が次の保育に生かされる実感をもてずにいる保育者も多いようです。子どもの安全さえ守られれば日々の保育に支障が生じないからと、いつしか記録に時間や労力を割かなくなる――そんなサイクルに陥る園も見られます。

しかし、子どもの経験は一様ではありません。砂場遊び１つをとっても、子どもにより、時期により、一人ひとりが経験することは異なるため、それらを読み

表2 主な保育記録の様式と特徴（長所：＋　短所：－）

様式	特徴
保育マップ型記録	（＋）保育環境に位置づけて、遊びや人間関係を記述する。空間を俯瞰的に捉え、同時多発的に起こる遊びを記録できる。 （－）時間経過に伴う遊びの変化や人間関係の変化などは記録しづらい。
週日案型記録	（＋）その日の計画と対応させて保育を振り返るため、１週間の流れの中で子どもの姿を捉えやすい。 （－）記述スペースが限られるため、活動の記録中心になりやすい。エピソード記入欄を別に設けて補う方法もある。
個人名簿型記録	（＋）個々の姿を記録するため、遊びを通した経験や育ちを捉えやすく、保育者と子ども一人ひとりとのかかわりも見えやすい。 （－）年齢を経て友だち関係が深まると記述が難しくなる。
日誌型記録	（＋）１日の保育の流れに沿って記録するため、その日の活動を振り返りやすい。 （－）事実の羅列になりやすいため、子どもの経験の読み取りを意識して記述する必要がある。

図1 個人名簿型記録の例

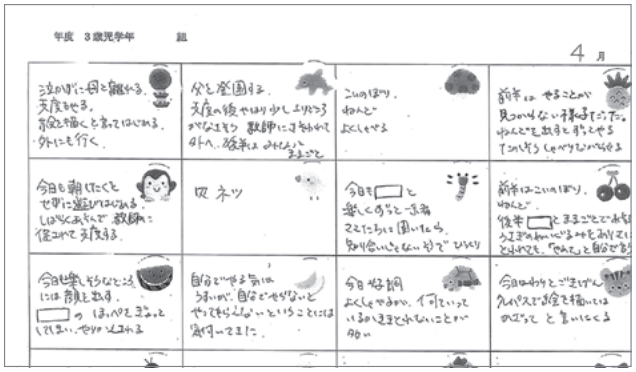
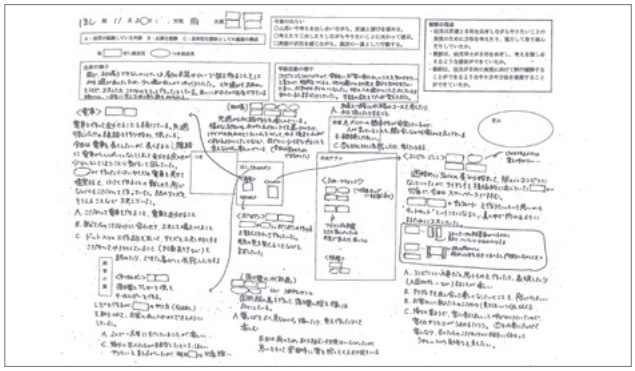


図2 保育マップ型記録の例



※ 拡大図は P8 図2 を参照。

取ることが子どもの育ちを促すために欠かせません。そのことを念頭に置き、各園の保育記録のあり方を改めて見つめ直していただきたいと思います。

めざす保育に向けて自園に合った記録様式を選ぶ

保育記録の出発点となるのは、保育者の心の動きです。日常の楽しいことはだれしも記録しておきたくなるのと同じように、日々の保育の中で「こんな育ちが見られた！」といった驚きや喜びが、記録に向かう際の重要な動機となります。本来、保育記録とは楽しいものだということを忘れないようにしたいものです。

保育記録の様式は多様ですが、心が動いたことを記録として残すのですから、どんな様式でもエピソードが記録の中心になるはずです。ここでは代表的な４つをご紹介します（表2、図1・図2）。それぞれ一長一短があるため、自園がめざす保育や改善したい課題に応じて選ぶとよいでしょう。園として情報共有がしやすいように、基本的な様式を統一する一方で、子どもの発達段階や保育者の個別の課題に合わせて、無理のない範囲で別の様式を併用してもよいでしょう。例えば、入園・進級間もない子どもについては「日誌型記録」や「個人名簿型記録」で個別の動きを読み取ることを重視し、園生活に慣れてきた頃に「週日案型記録」に変える。目の前の子どもとのかかわりで手一杯になりがちな保育者は、月１回だけ「保育マップ型記録」を作成して全体を俯瞰（ふかん）する力を伸ばす、などです。あるいは、保育に感情を込めるのが苦手で子どもとの距離感がある保育者は、「個人名簿型記録」で一人ひとりの姿をじっくりと追い、エピソードを記述して子どもとの距離感を縮めるとよいでしょう。そうした保育記録を持ち寄って園内研修で検討するなどして、保育者個人の成長、ひいては園全体の保育力の向上につなげ

ることが大切です。

「SOAP」の視点で保育の内容を見つめ直す

保育記録にどのような様式を取り入れるにしろ、漫然と子どもの姿を眺めるのではなく、しっかりと視点をもって経験や育ちを読み取る必要があります。

そこで提案したいのが、「ＳＯＡＰ」と呼ばれる記録の視点です。もともと「ＳＯＡＰ」は医療現場における看護記録の手法で、患者のもつ問題を多面的かつ正確に捉えて有効な治療方法を見いだすためのものです。その考え方を保育記録にも応用するのです。

「ＳＯＡＰ」が優れている点の１つが、あらゆる様式の記録で使えることです。週日案型記録も、全体を捉える保育マップ型記録も、「ＳＯＡＰ」の視点を取り入れることで記述内容がぐんと深まります。

ではその方法を順に見ていきましょう（表3）。

【Ｓ】は、保育者が見た子どもの姿を記述します。だれとだれが何をして遊んでいたか、人間関係はどう展開したか、などです。心に響いたエピソードを中心に、できるだけ同時多発的な遊びを捉えていきます。

【Ｏ】は、客観的に見つつも保育者が受け取った感情を交えて子どもの姿を読み取ります。子どもは何を面白いと感じていたか、どのような経験や育ちがあったか、などです。このプロセスは、「遊び課題」と「人間関係」の２つの視点をもつと捉えやすくなります。遊びは、遊びそのものの楽しさと、それを支える人間関係が作用して展開するためです。子どもは遊びのどこに面白さを感じ、どれくらい深まっていたか。そして、その遊びを巡り、どのような人間関係が見られたかに着目してください。

【Ａ】は、保育者の願いです。子どものこれまでの経験を受けて、次に必要な経験を検討します。ここが、保育の質を高めるためにとても重要なプロセスです。

【Ｐ】は、次に求められる環境の構成を記述します。【Ａ】に書いた経験が満たされる活動や環境、援助を検討しましょう。例えば、泥団子遊びを発展させるために、次にどのような道具を用意するか、ほかの子どもに面白さをどのように伝えるか、といった援助を考えます。

保育記録に「ＳＯＡＰ」を取り入れる際、【Ｓ】～【Ｐ】それぞれの視点を記入する欄を設けてもよいですが、既存の様式をそのまま用いて、すべての視点を混ぜて

表3　保育記録に取り入れたい視点

【S】幼児の姿 Subjective Data （主観的データ）	・だれとだれが、どこで、何をして遊んだか ・どのような人間関係が見られたか ・環境とどうかかわっていたか ・どのような道具を使っていたか	幼児理解
【O】読み取り Objective Data （客観的データ）	・どこに面白さを感じていたか ・どのような経験をしていたか ・何が育っていると考えられるか 「遊び課題」と「人間関係」の２つの面を見る	幼児理解
【A】願い Assessment （アセスメント、評価）	・どのような成長につながりそうか ・次はどのような経験が必要になるか	理解に基づいた援助
【P】環境の構成 Plan （計画）	・次の成長を促すためには、どのような環境や活動が必要か ・どのような援助が必要か	理解に基づいた援助

書いてもかまいません。その場合は、４つの視点に該当する部分に、視点ごとに色分けしてマーキングしながら読み返すと、「具体的な環境構成への視点が足りなかった」など改善すべき点が見えやすくなります。

理解から援助へのまなざしを保育の中に組み込む

こうしてみると、「SOAP」の【S】と【O】はその日のことを振り返り、子どもが遊びや活動の中で学んでいることを捉える視点であり、【A】と【P】は次の援助を考える視点といえます。この「理解」から「援助」へのまなざしが保育の中に組み込まれることで、根拠をもって次の保育へとつなげていけるのです。

この観点から、日々の記録に加えておすすめするのが週ごとの記録です。子ども一人ひとりにとって、またクラスにとって、この１週間にどのような経験があったかを振り返ります。ポイントになるのは、【O】の読み取りの中で、子どもたちに共通する姿をくくり出して、その状態を生かした次の活動を考えることです。例えば、異なる遊びを展開する中でも、「言葉のやり取りが活発になってきた」「遊びに集中する時間が長くなってきた」といった共通点を見つけます。それをもとに翌週のねらいを定め、子どもが次のステップに進めるような援助や環境構成を考えます。記録の読み取りを通して日々の子どもの様子をつなぎ、中長期の指導計画にも反映させていくとよいでしょう。

保育者が記録を続けたくなる肯定的なフィードバックを

これから保育記録を充実させようとする園は、最初から完璧を求めず、慣れるまでは簡易型でもよいので、とにかく継続して記録することが大切です。継続することで、時間の経過に伴う子どもの成長が見えてきます。成長が実感できると記録の意義もわかり、もっと続けたいと思うようになるでしょう。また、遊びがどのように盛り上がって、子どもにどんな変化があったのかという、遊びのまとまりもわかるようになっていきます。そうなると、１日のできごとを一連の活動の流れの一部として捉え、記述できるようになります。

管理職の先生は、保育者が記録を続けたくなるようなフィードバックを心がけましょう。記録内容をチェックするだけでなく、ごく短いメッセージでよいので、肯定的な内容を返します。「この援助がすばらしいね」「もっと詳しく知りたいな」などと書けば、保育者は励まされ、記録を続ける原動力になります。

忙しくても保育記録は欠かさないそんな園文化としくみを工夫する

多忙化への配慮も欠かせません。保育記録に限りませんが、重要性を感じない仕事に対して、わざわざ時間を捻出しようという気持ちにはなりません。まず、保育記録は大事で、優先度を高めて取り組むべきという雰囲気を園内につくりましょう。同時に、個々の保育者の工夫を促します。

もっとも、個人では解決できない場合も多いため、組織としての取り組みも必要になります。最近では、子どもと向き合わずに他の業務に集中できる「ノーコンタクトタイム」制度を取り入れ、その時間を保育の記録に充てる園が見られ始めました。また、各保育者の記録をクラウドシステムで管理し、いつでも自由に閲覧できるようにすることで、情報共有の省力化につなげる園もあります。

記録に写真を活用するのもよい方法です。最近は機器がコンパクトで高性能になり、保育者が常備する姿をよく見かけるようになりました。心を動かされた場面を中心に撮影し、あとから振り返ったり、保護者への情報共有に用いたりできます。写真で子どもの姿を発信する際は、文章によるエピソードを添えると、遊びの中に学びや育ちがあることが伝わります。

保育記録は、最初は個別の保育を記すプライベートメモリーですが、継続して蓄積されると園の文化となり、パブリックメモリーになります。目の前の子どもたちの育ちに欠かせないものであると同時に、長期的には、次代の幼児教育を創ることにつながる、社会的な意味も大きい仕事です。保育記録を楽しむ気持ちで、ぜひ前向きに取り組んでいただきたいと思います。

事例 1

東京学芸大学
附属幼稚園
小金井園舎

東京都・国立

「保育マップ型記録」を介して子どもの経験や思いを読み取る力を高める

取り組みのポイント

- **「保育マップ型記録」を通して全体と個をバランスよく把握**し、次に必要な経験と援助を検討する。
- 記録を毎日継続できるように、**基本的な形式だけ定めておき**、記述する内容は**個々の保育者の裁量に任せる**。
- 「保育マップ型記録」の蓄積を生かして、週案や教育課程など**長いスパンの計画に子どもの実態を反映させる**。

遊びや経験を言語化して次の保育につなげる

子どもの動きを俯瞰（ふかん）して全体と個をバランスよく把握

東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎は、地域の子どもの育ちを支えるとともに、教育研究・教員研修を目的として開園されました。自然環境に恵まれた園内では、子どもが興味・関心に応じて選び取った遊びを、個々の発想で深めていく保育を展開しています。

子どもの思いを支えるためには、継続的な記録を通して一人ひとりの姿を丁寧に捉えることが不可欠と考え、長年、その方法や様式を研究してきました。現在は園全体で大きく４つの記録段階があり（図1）、日々の「保育マップ型記録」が記録の最小単位となっています。副園長の山田有希子先生は次のように説明します。

「遊びや活動を記録することは、子どもの経験や思い、学びを言語化することです。保育記録が充実することで、保育者の振り返りがより豊かな形で次の保育へとつながっていきます。保育マップ型記録は子どもたちを全体的に把握できる点が特徴で、広い園庭での子どもの遊びや動きを捉えたいといった本園のニーズにマッチしたこともあり、担任をもつ保育者が共通で取り組んでいます」

東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎
副園長
山田有希子先生

3歳児クラス担任
町田理恵先生

3歳児クラス担任
曽根みさき先生

山田先生によれば、同園で使っている保育マップ型

図1 園で運用する4つの記録段階

- **教育課程**
  各学年を３つの時期に分けて教育計画を作成。
- **期の計画**
  １か月～１か月半のスパンの中期計画を作成。
- **週案**
  前週の振り返りに基づき、今週の計画や具体的な援助、環境構成を検討。
- **保育マップ型記録**
  子ども全体の動きを俯瞰して、子どもの遊びや経験の意味を読み取り、次の援助を検討。

※このほか、各学年や担任の判断により、子どもたちの実態に合わせて個人記録なども取り入れている。

記録には次のような長所があるといいます。

◎クラス全体を俯瞰できる

保育マップ型記録では、だれが、どこで、だれと、どのような遊びをしていたかをマップ（保育環境図）の中に記録します。そのため、クラス全体の動きを俯瞰できます。また、子どもの遊びや経験を読み取る力が高まります。

◎全体と個をバランスよく記録できる

個人の遊びや経験を全体に位置づけて読み取っていくため、全体と個をバランスよく記録することができ、子どもを多面的に読み取る力が高まります。

◎次の保育につなげやすい

子どもの経験を読み取り、そこから考えた次の援助を記入しているため、明日の保育の改善につながります。

一方で、短所もあるといいます。

「短時間のうちに子どもの遊びの内容や人間関係がめまぐるしく変化する場合は記述しにくくなります。また、一人ひとりの傾向や変化などは書き表しにくいことがあります。そのため、入園間もない３歳児クラスでは、初めのうちは個人記録を併用することもあります」（山田先生）

「SOAP」の手法をアレンジし子どもの経験を深く読み取る

同園では保育マップ型記録を取り入れてから何度か様式を見直し、現在は図2（P８）のようなフォーマットを用いています。それぞれの記入欄のねらいや内容は次の通りです。

❶今週のねらい

子どもの姿を読み取るよりどころとして「今週のねらい」を記入します。ねらいにせまっているか、または遠ざかっているかなど、子どもの経験を評価する物差しとなります。

❷保育者の読み取り

子どもの経験や遊びに対する保育者の読み取りを記入します。聖心女子大学の河邉貴子先生が提唱する「ＳＯＡＰ」型の記録の視点（Ｐ４表3）を、河邉先生の指導のもとアレンジしました。具体的には、最初に《子どもの遊びの様子》をマップ上に位置づけて書き、続いて《ＡＢＣ》の３つの視点で子どもの経験を読み取ります。「ＳＯＡＰ」の「Ｓ」が《子どもの遊びの様子》の記述になり、以下「ＳＯＡＰ」の「Ｏ」が《Ａ》、「Ａ」が《Ｂ》、「Ｐ」が《Ｃ》となります。

《Ａ》遊びの中で子どもが経験していることを読み取って書きます。※「SOAP」の「O」に該当
《Ｂ》次に必要な経験を考えて書きます。※「SOAP」の「A」に該当
《Ｃ》必要な経験を実現するための具体的な援助や環境構成を考えて書きます。※「SOAP」の「P」に該当

❸保育者の直感

《ＡＢＣ》で記述しきれない保育者の気持ちや感覚は、「マーク」（よいと感じたこと）、「マーク」（あまりよくないと感じたこと）で表します。言語化できる部分と感覚的な部分が行き来できる記録を大切にしています。

子どもの遊びを可視化して考えると次に必要な援助が見えてくる

保育マップ型記録を通して、保育者はどのように保育を見つめ直し、次の保育につなげるのでしょうか。３歳児クラス担任の町田理恵先生が、５歳児クラスの担任のときに書いた記録を例に見ていきます。

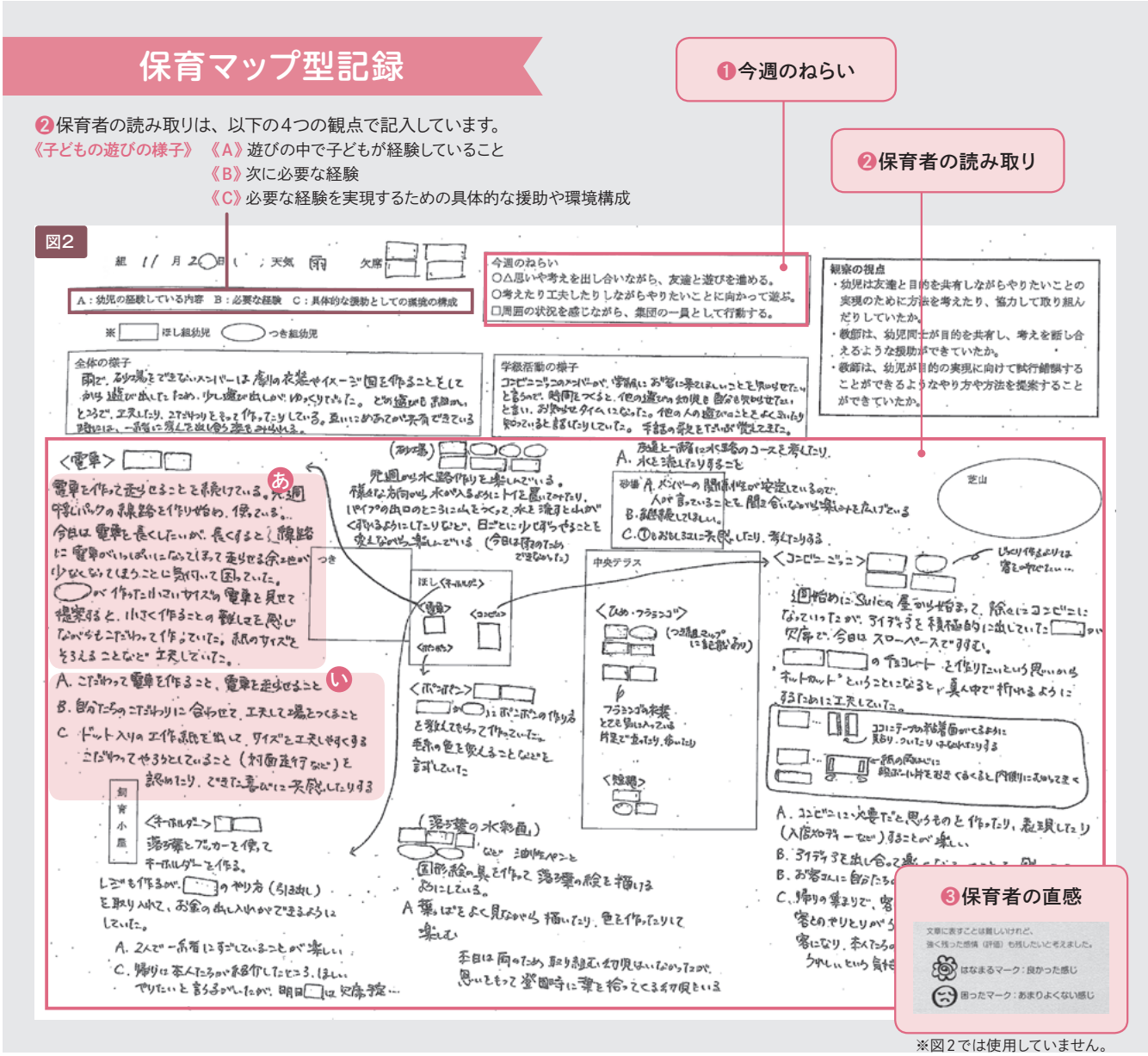
まず、２人の子どもが電車を作って走らせる遊びを続けていましたが、電車を長くしようとしたとき、牛乳パックで作った線路を走らせる余地が少ないことに

気づいて困っていた様子が、マップに位置づけて書かれています（図2 - あ）。

町田先生は、《A》（遊びの中で子どもが経験していること）として、「こだわって電車を作ること。電車を走らせること」と書き表しました（図2 - い）。子どもたちの様子から、単に電車を作るだけではなく、電車を走らせることにも「こだわって」作っている、と捉えたからです。そこで《B》（次に必要な経験）には「自分たちのこだわりに合わせて、工夫して場をつくること」と記述しました。ここまで書いた後、立ち止まって今後必要となってくる援助を考えました。

「上手に走らせるには、電車はそのままで線路のサイズを変えるという方法もありましたが、記憶を整理しながら《B》を考えるうちに、子どもたちは『電車』を作ることにこだわっていたと改めて気づきました。そこで、子どもが自分から『電車を小さくすればよい』と気づいて工夫したくなる援助を検討しました」

そうした考えのもと、《C》（必要な経験を実現するための具体的な援助や環境構成）は「ドット入りの工作紙を出して、サイズを工夫しやすくする」「こだわってやろうとしていること（対面走行など）を認めたり、できた喜びに共感したりする」としました。この後、実際に子どもたちは工作紙で小さくてかっこいい電車を作り、遊びが広がっていきました。



※図2では使用していません。

記録が保育の質向上につながるという確かな実感がある

記録を継続する中で経験を読み取る力が育つ

保育マップ型記録は、難度の高い様式に見えるかもしれません。実際にすべての子どもの経験を丁寧に読み取って記録することは容易ではありませんし、時間もかかります。しかし、同園では、記録用紙を埋めることを目標とせず、それぞれの保育者が読み取れた範囲で記録しています。記録にかける時間は30分程度を目安としていますが、書きたいできごとが多い日はそれ以上になったり、忙しい日は簡易的に10分程度で書き終えたりと、具体的な書きぶりも保育者の裁量に任せています。

「記録の完成度を高めることが目的ではなく、あくまでも保育の質を高めることが目的ですから、各々の状態に合わせて記録すればよいと考えています。経験が浅くて読み取れることが少ない保育者は、記述量も少なくてかまいません」（山田先生）

例えば、教職歴が10年を超える町田先生は、印象的なできごとは《ＡＢＣ》に沿ってしっかりと記録しますが、それ以外はすべてを書かないこともあります。

「記録する内容は、保育中の自分自身の感情をもとに考えることが多いです。『今日はこの遊びが盛り上がった』『かかわるところをあまり見ない２人が仲良く遊んでいた』など、うれしかったり驚いたりしたことを真っ先に、《ＡＢＣ》まで記録します。ほかは、子どもの名前を書いて思い出しながら、《ＡＢＣ》を入れています」

完成した記録は、すべての遊びが同時に展開しているように見えますが、実際には異なる時間帯の遊びがまとめられていたりもします。

新任の曽根みさき先生は、《ＡＢＣ》と分けて書くことに難しさを感じているため、自分なりに書き方を工夫しています。

「《Ｂ》の必要な経験を考えるのが特に難しいです。そこで、まず子どもの姿を見て《Ａ》を書き、具体的な援助の《Ｃ》を書いてから、そこから見えてくる《Ｂ》を書いています」

また、曽根先生は、毎日の終わりに記録を書いて子どもの姿を振り返り、翌日の準備をすることが日課になっているといいます。

「保育時間はあっという間に過ぎていくので、何も考えずに子どもに向き合い、『こう思っているとは知らなかった』『これを用意しておけばよかった』などと、その場になってから気づいて後悔したくないという思いがあります。最初は全体の把握にとらわれて個の姿が読み取れなかったり、記録したいと思った場面を、実は十分に捉えられていなかったりして書けないことがよくありました。そのたびに『明日はこの場面やこの子どもを重点的に見よう』といった視点をもつようにすることで、記録できる内容が少しずつ深まっていると実感しています」

山田先生は、「保育中に感じた自分の思いを、すべて記録できるわけではありません。だからこそ、記録に向かうときに頭の中が整理され、子どもの姿や自分に足りないところが見えてきて、次の日の保育のポイントがわかります。記録は明日の保育を考えるときのよりどころなのだと思います」と話します。

保育者間で記録を共有し情報共有や意見交換を推進

園全体で同じ保育マップ型記録に取り組むよさの１つが、情報共有や意見交換をしやすいことです。

同園は各学年２クラスありますが、２人の担任が学年を一緒に保育する形態をとっています。そのため、常時、保育マップ型記録を見せ合い、子どもの遊びがどう展開しているかを共有しています。

「記録を書いていると、子どもたちのさまざまな姿が思い出されます。そのため自然と隣のクラスの担任に『今日、こんなことがあってね』と伝えたり、『先生のクラスの○○ちゃんが、こんなことをしていたよ』と気づかなかったことを教えてもらったりと、子どもについて語り合って理解を深めるきっかけになってい

ます」（町田先生）

さらに園内研修にあたる保育検討会などでも、保育マップ型記録を活用しています。保育検討会では、前日の保育マップ型記録と、日々感じている自己課題を提示したうえで、当日の保育を公開します。見学者はシートに意見を記入し、それをもとに意見交換を行います。

「保育検討会では、子どもがよりよくなるための援助について、前向きな意見を交わし合います。他の保育者から『自分ならこうする』と異なる視点の意見をもらうなど、毎回多くの学びがあります」（町田先生）

経験の多少にかかわらず保育記録を見せ合い、語り合うことで、園全体としての記録の質が高まり、それが保育の質向上につながっているといえます。

日々の記録の蓄積を共有し長期的な成長を捉える

保育マップ型記録は、日々の保育の改善だけではなく、週案などにも生かされています。同園の週案には、前週の振り返りを記入する欄があり（図3）、保育者が１週間の保育マップ型記録を読み返して子どもの育ちや変化を捉えています。

「週ごとに振り返ると、１日ではわかりづらい子どもの育ちや変化が見えてきます。特に、異なる遊びを展開する子どもたちの間に共通する育ちに気づくことがよくあります」（山田先生）

また、過去の同時期の週案と見比べて、子どもの育ちの傾向などを確認しています。

同様に、教育課程や期の計画など中長期計画の作成も、保育マップ型記録の蓄積により子どもの成長を捉えることが出発点となります。

同園では保育記録の継続による効果が、明日の保育の改善だけではなく、中長期計画の立案や保育者の資質の向上、ひいては園文化の形成など、実に多くの面に波及しています。記録は保育の質向上の手段であり、実際に役に立つという確かな実感のもと、保育者が前向きな気持ちで日々の記録に取り組む文化が根づいているようです。

週案

先週の子どもの姿をもとに、今週の援助や環境構成を検討する。週案では、保育マップ型記録のうち、特に《B》《C》を参照して、必要な経験を支える保育を具体的に考える。

図3

平成２８年度　５歳児学年　今週の指導計画（１０／３１～）

ほし組　担任：　在籍：男児１３名　女児１２名　計２５名
つき組　担任：　在籍：男児１１名　女児１４名　計２５名

先週の幼児の姿（○遊び △人間関係 □生活）	ねらい及び内容	環境の構成
○しっぽとりや宝取り、午後にはサッカーを繰り返し楽しんでいる。始まる前に同じチームの仲間と掛け声をかけたり作戦会議（守る人、攻める人を決めてみる）をしたりすることが楽しいようだ。ルールや遊び方を考えたり伝えたりしながら遊んでほしい。 ○猫ごっこや警察ごっこ、大ブロックを使った家ごっこでは、必要な場や物を作るものの、そこで満足したり遊びのイメージが乏しくてワンパターンな動きしか見られなかったりしている。遊びのイメージを豊かにしていく援助が必要である。 ○砂場ではままごと道具を使って手順を踏みながら作っていくことを楽しむ幼児や掘ったり水を流したりしながら砂や水の変化を楽しむ幼児がいる。意識して動きながらも、再現や偶然の変化を喜ぶ姿が見られる。様々な変化（「こうなったね」）を楽しんだり、原因（「どうしてかな」）と考えたりすることを促していきたい。 ○ビー玉転がしではカプラや磁石を使った道作りを繰り返し楽しんできたが、崩れやすい性質の素材や大人数で遊ぶことが難しくて遊びが停滞したり続いかなかったりしている様子が見られる。新たな道具や素材を投げかけてみる。	○△友達に思いや考えを伝えたり、友達の話を聞いたりしながら、遊びを進めていく。 ・自分の思いを分かるように伝えたり、友達の話を聞いたりする。 ・遊びのイメージを元に考えを出し合い、遊びを進める楽しさを味わう。 ○様々な材料や道具を使い考えたり工夫したりする。 ・道具に慣れ、素材を選びながら自分にめあてをもてって遊ぶ。 ・作戦を考えながら、大勢の友達と遊ぶ	○△友達に思いや考えを伝えたり、友達の話を聞いたりしながら、遊びを進めていけるように ・積み木や大ブロックのパーツや形の意味を聞きながら、遊びのイメージに沿って意味づけていく。前日までの経験を生かして場をつくっている様子をとらえて認めていく。 ・遊びのイメージに合わせて、遊具や素材などを提供したり、一緒に探したりする。イメージがあいまいな場合は、絵本や図鑑、教師の考えを知らせ、具体的な遊びのイメージやめあてがもてるようにする。 ・遊びのめあてがもちにくいグループには、幼児から出るやりたいことの芽やきっかけとなるものは大事にしながらも、教師が新しいやり方や道具などを提示しながらめあてがもてるような援助をする。 ・自分のやりたいことや気持ちを出し合いながら遊びを進めている姿を認める。なかなか言葉で表しにくい幼児がいることを知らせながら、仲間の意見を聞く大切さに気付けるようにする。やりたいことが仲間同士で共有しているかとらえながら、見守る。 ○様々な材料や道具を使い考えたり工夫したりできるように ・木工活動ができるように、板、くぎ、くぎぬき、金づちを用意する。最初は必ず教員が付き、道具や素材に慣れるように見守る。最後まで打つ満足感を味わっていることを認める。 ・ルールのある遊びでは、考えながら動いているところを言葉にして認めたり、上手くいっていないところを意識しやすいようにつぶやいたりする。 ・答えを言うかかわりではなく、様々な変化や原因を出し合う援助を行う。 ・比較する相手や物があると考えやすいので、教師も作ったり、仲間を探したりして、

先週の子どもの姿を振り返る。保育マップ型記録を読み返して、１週間の子どもの成長や変化を記録する。

幼児理解が深まった、あの頃、あの場面

子どもの思いをありのままに受け止めると温かい空気感に包まれるようになった

東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎　３歳児クラス担任　町田理恵先生

「子どものどのような思いにも大切な意味が込められている」というのが、私の子どもに対する考え方です。そして、その思いをありのままに受け止めて支える保育を心がけています。

しかし、かつての私は違いました。「こう思ってほしい」「こう楽しんでほしい」と、一見、子どものことを考えているようで、実のところは保育者の思いを押しつける援助をしていたのです。新任の頃に自分の保育の様子を撮影した動画が残っています。その中で私は、望遠鏡に見立てて遊んでほしいと、トイレットペーパーの芯とセロファンを用意しました。ところが意に反して、子どもはそれを牛乳瓶に見立てて遊び始めたのです。焦った私は道具を持って、「こうすれば望遠鏡になるよ！」と、子どもの思いを無視して先走ってしまっていました――あまり思い出したくない過去です。

そこから私が子ども主体の視点をもてるようになっていったのは、保育マップ型記録の存在が大きかったと思います。自分の保育に子どもが反応する姿を振り返る経験を積み重ねるとともに、先輩方の記録を拝見し、「こう考えて援助しているのか」と感心し、まねすることを繰り返しました。

次第に子ども視点の保育へと変わっていくと、子どもが思いを表現するまで、気持ちに余裕をもって信じて待てるようになりました。そのうちに子どもと一緒にいるときの空気感も変わってきて、思いが１つになる感覚をもてることがあります。

今担任をしている３歳児クラスに、毎朝、「外で遊びたくない」と泣く子どもがいます。かつての私なら「こんなに楽しいことがあるよ！」と、あの手この手で外に連れ出そうと思案したと思います。今の私は、「中にいてもいいよ。出たくなったらおいで」と、本心から言葉をかけることができます。そこにある子どもの思いを受け止めることが、もっとも大切だと思うからです。すると、不思議なことにふらりと外に出てきて楽しそうに遊ぶこともあります。たとえ翌日にまた「外で遊びたくない」と泣いたとしても、それでいいと思っています。

私がしっかりと受け止めるから、それがポジティブであれネガティブであれ、安心して自分の思いを出してほしい。そんな関係で育んだ安心感や信頼感が、子どものこれからの成長の支えになると、信じています。

東京学芸大学附属幼稚園
小金井園舎

◎教育目標は、「感動する子ども・考える子ども・行動する子ども」。家庭や地域社会と連携し、個性を生かす教育、障がいのある幼児を受け入れ、共に育ち合う教育をめざす。

園長　君塚仁彦先生
所在地　東京都小金井市貫井北町 4-1-1
園児数　149人

事例 2

さくら保育園

京都府・私立

めざす保育に合わせて記録様式と内容を改善 子どもの育ちを丁寧に見取る

取り組みのポイント

- 週日案では集団や個人のエピソードを**前向きに捉えて**次の活動につなげる。
- 週日案に前向きなフィードバックを行い、**保育者を認めて励ます**。
- 写真を多用したドキュメンテーションで、**子どもの育ちを保護者にわかりやすく伝える**。

毎日のエピソード記録で子どものリアルな姿を捉える

保育者主導の保育から子ども主体の保育に転換

さくら保育園は、2016年度にそれまでの設定保育から、子どもの自発的な遊びを中心とする保育へと転換し、その中で保育記録を見直してきました。保育方針を大きく変えたきっかけは、園長の森田達郎（たつお）先生が、市主催の公開保育などで他園を視察する中で、子ども一人ひとりの思いを尊重する保育の大切さに気づいたことでした。

「子ども主体の保育に取り組む園では、活発な中にも落ち着いた雰囲気で、一人ひとりが遊び込んでいる印象をもちました。その姿にひかれ、保育者主導の保育を変えたいと思ったのです」（森田達郎先生）

まず行ったのは、保育環境の見直しです。子どもが玩具や製作用の素材を自由に選び取れるように配置を工夫しました。そして、自由遊びの時間を充実させました。行事の内容もあらかじめ保育者が決めて取り組ませるのではなく、子どもたちが話し合うようにして、子ども自身が自然に主体的にかかわれるようにしました。

京都府舞鶴市
社会福祉法人
倉梯福祉会
さくら保育園

園長
森田達郎（たつお）先生

副園長
森田あゆ美先生

子どもとの接し方も再考しました。指示や禁止の言葉を極力減らし、子どもと同じ目線に立って提案や依頼をしたり、乳児には担当制を導入して愛着関係を築いたりすることを大切にしました。

当初は、保育者、子どもともに新しい環境に慣れず、苦労の連続だったといいます。それまでの保育を否定されたように感じた保育者からは「どうしたらよいのか」「保護者にどう説明すればよいのか」などの声も上がりました。それでも「保育者が納得して実践することが大事」という園長の考えに基づき、研修や話し合いを重ね、地道に考え方の共有を図りました。集会やおたよりなどで保育方針を丁寧に説明して、保護者

の理解を得ることにも努めました。

週日案にエピソードを記録 ポイントは「前向きな視点」

こうした子ども主体の保育に欠かせないのが、一人ひとりの思いを正確に捉えることです。そのために、保育記録のあり方を見直すことにしました。

同園には各種の記録がありますが（図1）、毎日の保育内容に直結するものとして「週日案」を重視し、保育の質を高めるために様式の試行錯誤を重ねています（P14 写真1 写真2）。

同園が今まで用いてきた週日案は、日記のように毎日の活動内容を記録するシンプルな様式でした。2016年度からは、活動予定や評価・反省の記入欄を追加し、遊びや活動の展開の中で子どもの姿を連続的に捉え、次の成長につなげられるようにしました。

さらに2018年度より、「エピソード」の記入欄を新たに設けました。副園長の森田あゆ美先生はそのねらいを次のように語ります。

「子どもの成長や発達には必ずエピソードが伴います。毎日の保育の中でエピソードをしっかりと捉えて記録することで、次の具体的な援助が見えてくると考えました」

エピソードは、その日の保育の中で、子どもの成長が表れていたり、強い思いが感じられたりなど、保育者の印象に残った場面を具体的な表現で記録します。クラス全体を捉えたものでも、特定の子どもに焦点をあてたものでもよいとしていますが、必ず前向きな内容を記入するようにしています。

図1 さくら保育園における保育に関する記録

◎全体的な計画
◎年間指導計画
◎月案（3～5歳）
◎個人別指導計画（0～2歳）
◎連絡帳（0・1歳）
毎日の連絡事項のほか、子どもの姿や成長を保護者と共有。
◎週日案（0～5歳）
クラスごとに毎日記録。週の予定とともに、毎日の活動内容、子どもの姿、振り返りに加え、「エピソード」を記入するのが特徴。
◎月末の振り返り
クラスごとに子どもの様子や気になること、エピソード、翌月のねらい、育てたいことなどを整理し、保育者間で共有。
◎ドキュメンテーション（不定期）
保護者に伝えたい成長が見られたときなどに、クラスごとに作成し、保育室の入り口や廊下に掲示。
◎クラスだより
ドキュメンテーション形式で、主に子どもの成長や発達の様子を保護者と共有。2か月に1回発行。

「当初は、『こんなトラブルが起きてしまった』『○○ができなかった』といった後ろ向きなエピソードも見られました。しかし、次の援助を考えるために記録しているのですから、子どもの中で伸びてきた面や次につながりそうな姿に着目しようと呼びかけました」（森田達郎先生）

その点で、記録のしかたがやや難しいのは、2・3歳児だといいます。

「自己主張が強くなり、おもちゃの取り合いなどのトラブルが多発する時期であるため、どうしても課題が目につきやすくなります。エピソードでは、『困った』『注意した』という否定的な捉え方で終わったり、逆に課題から目を背けたりせずに、しっかりと現状を捉えた上で、『こんな姿につなげたい』『こんな援助をしてみたい』といった前向きな表現を心がけるようアドバイスしています」（森田あゆ美先生）

0歳児についても、保育者から「言葉によるコミュニケーションがとれないため、エピソード記録が難しい」という声が上がることがあります。

「一人ひとりの姿を注意深く観察すると、ハイハイが始まったり、言葉の芽生えがあったりなど、必ず見えてくることがあるので、それを捉えてほしいと考え

ています。同時に発達過程についてしっかり勉強すると、こうしたエピソードが見えやすくなることも、先生方に伝えています」（森田あゆ美先生）

週日案を通じて情報共有 管理職のコメントが励みに

毎日の週日案は、３～５歳児が合同保育となる17時以降、２人担任のうちの１人が20～30分で記入しています。エピソードの内容や記述のしかたは、基本的に保育者に委ねており、負担感を軽減するために、「無理に毎日書く必要はない」とも伝えています。

以前は、週日案に関して、管理職は週１回ほどしか確認せず、少し距離を置いて見守るようにしていました。ところが、保育の方針を転換してからは担任の悩みが増えたこともあり、「一緒に保育に入って助言してほしい」といった声が寄せられていました。そのため、現在は森田あゆ美先生が毎日チェックしています。付箋紙に前向きなコメントを書いて貼りつけ、子どもの成長を表すエピソードに対しては「○○ちゃんのこんなところが育っていますね」と一緒に喜んだり、遊びが停滞していると感じた場合には、おすすめの遊びが書かれたプリントを挟んで渡したりすることもあります。

「できるだけ一緒に保育室で見守りたいのですが、難しい日もあります。週日案は、担任と園長・副園長・主任との連絡帳としても機能しており、各クラスで起きたできごとや新たな発見、子どもの育ちなどを共有し、共に課題に取り組む上で欠かせない情報交換の場となっています」（森田あゆ美先生）

保育者にとっても、「先輩が自分の記録を見てくれている。保育のアドバイスをしてくれる」という思いが、モチベーションの向上につながっているといいます。記録を続けることで、保育者自身が自分の保育を客観視し、見直すきっかけになっていくことを、園長を始めとする管理職は願っています。

週日案

2015年度まで 活動内容を記入するだけの用紙

2016年度

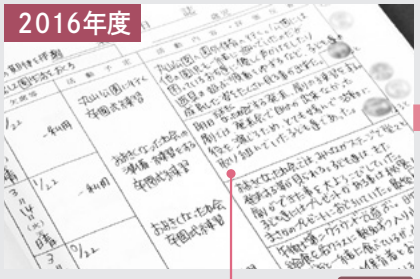


写真1

活動内容に加えて、週の予定や毎日の振り返りを記入する欄を設けて、子どもの姿を連続的に捉えられるようにした。

2018年度から

毎日のエピソード記入欄を新設。活動内容とエピソードを併記することで、子どもの姿や思いをリアルに捉えられるようにした。また、振り返りを踏まえて明日の予定も書くようにした。そのため、以前は１週間分を用紙１枚に記入していたが、２018年度から用紙２枚を使うようになった。

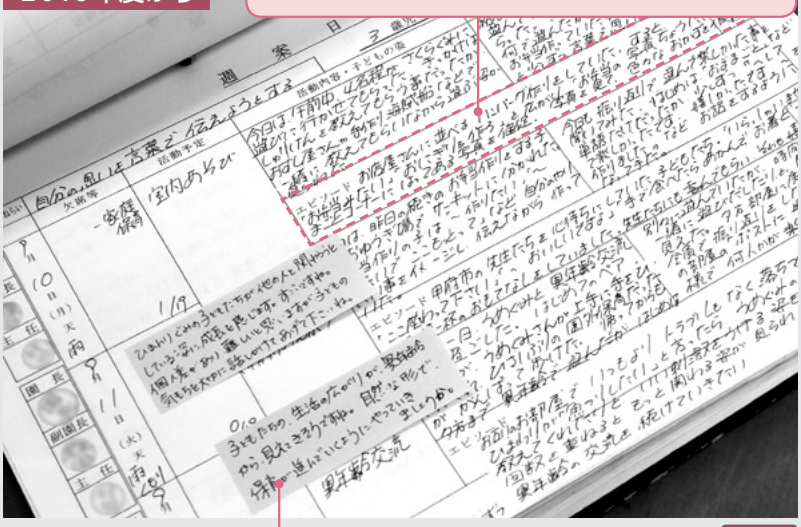


写真2

副園長が付箋紙にコメントを書いて保育者に返す。よかった点や次の援助はこうした方がよいといった前向きな内容を記述し、保育者のやる気につなげる。

保護者との情報共有や目線合わせに保育記録を活用

日常の活動を共有する ドキュメンテーションを作成

同園では、子どもの育ちを保護者に伝えることを主な目的とした、ドキュメンテーションの作成にも力を入れています。以前は、運動会や遠足といった行事での姿を伝えるためのものでしたが、日常の活動を通した成長を共有するために、現在は保育の中で保護者に伝えたいことがあったときに、不定期に発信しています（写真3 写真4）。各クラスにはタブレット端末があり、保育者は子どもたちの印象的な場面を写真や動画に撮影します。ドキュメンテーションは撮りだめた写真からピックアップして作成します。

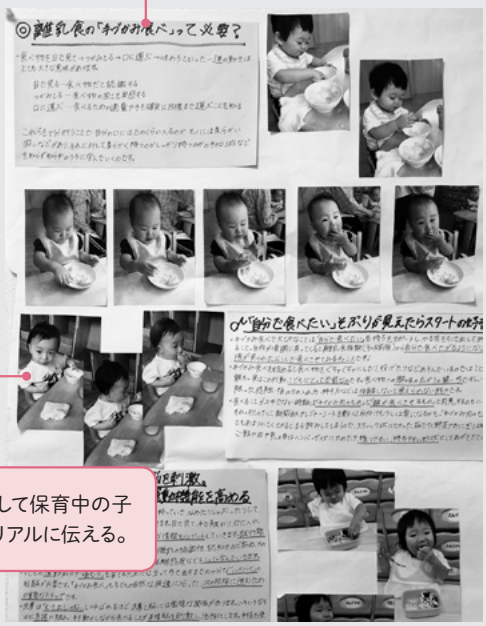
ドキュメンテーションを作成し始めてから、担任同士の情報共有も進みました。３歳児クラスで色に興味をもち始めた子どもが増えてきた頃、ちょうど４歳児クラスで色水遊びが流行していることがわかりました。そこから、２学年合同での新たな遊びにつながるなど、縦割り活動が活発になったこともありました。

保育方針の転換を機に、各学期末に発行していたクラスだよりの役割も見直しました。以前は行事の報告が主な内容でしたが、今では遊びの内容と子どもの成長を中心に、育った力の解説なども加えた内容に変更。ドキュメンテーション形式で作成し、２か月に１回発行しています。

「週日案にエピソードを記録しているため、クラスだよりを作るときに書きたいことがすぐに見つかります。複数の記録をリンクさせることで、記録の内容が深まりやすくなりますし、業務の効率化にもつながります」（森田達郎先生）

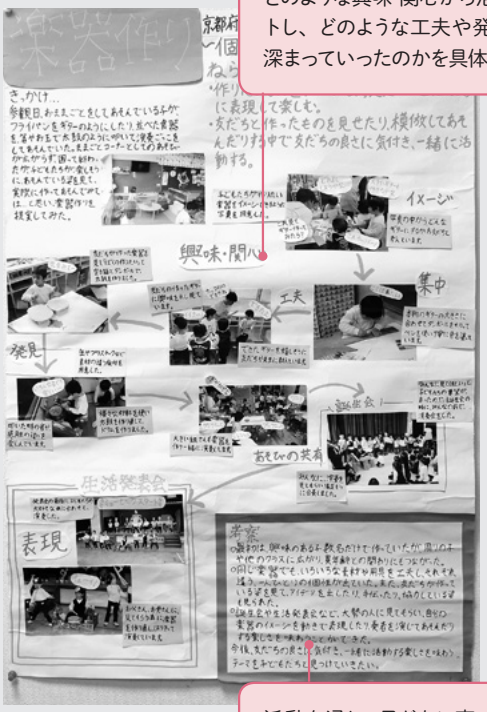
ドキュメンテーション

乳児の発達過程について丁寧に説明し、子どもの成長を保護者と共有。



写真を多用して保育中の子どもの姿をリアルに伝える。

写真3



どのような興味・関心から活動がスタートし、どのような工夫や発見があって深まっていったのかを具体的に説明。

写真4

活動を通して子どもに育った力などを担任が解説。ねらいをもった遊びであることへの理解を促す。

日常の記録で捉えた子どもの姿を長期計画に反映させる方法を模索

週日案をもとに長期的な計画を見直し、作成する方法も模索しています。

「子どもの興味や反応に合わせて活動を臨機応変に変化させる今の保育スタイルにしてから、実際の活動が年間指導計画や月案の通りに展開しないことが多くなっています。どうすれば週日案の内容を長期の計画に反映しやすくなるかを、試行錯誤しているところです」（森田達郎先生）

その１つが、毎月末、各クラスの担任による当月の振り返りです。「クラスの様子・今月取り組んだこと」「子どもの成長・発見・エピソード等」「翌月のねらい・育ててみたいこと等」を記入し（写真５）、職員会議で共有します。その内容をもとに子どもの興味・関心に合った翌月の活動を検討して月案にまとめます。さらに今後は、月案を半月ごとに分けて、子どもの実態により合わせやすくすることなどを検討中です。

保育の転換と記録の見直しにより保育者と子どもが大きく変わった

保育方針を変え、記録のあり方を見直してから、２019年度で４年目を迎えます。その間、保育者と子どもの双方にさまざまな変化が見られました。

まず、保育者が子どもの姿をよく観察し、そこから次の遊びや活動を考えて展開できるようになりました。特にエピソードを記録するようになってから、子どもの見方が深まったといいます。

「当初はエピソードの記録が難しいという保育者も多くいましたが、継続することで徐々に子どもの姿を的確に捉えられるようになり、具体的で生き生きとした記述ができるようになりました。以前よりも一人ひとりの動きや表情を注意深く見たり、つぶやきを拾うように努めたりと、子どもを見取る力が高まっていると感じます」（森田達郎先生）

子どもの姿も変化しています。自分のやりたいことに主体的に取り組んだり、責任をもって自分の役割をやり遂げたりする姿が見られるようになりました。３歳児クラスで、数人の子どもがままごと遊びの食器を楽器に見立てて遊んだことをきっかけに、クラス全体での楽器遊びに発展した活動は、遊び込む子どもが発揮する力の大きさに、保育者が驚きました（詳細は次ページ参照）。

自分の強みを生かした活動を通して、自信を深めていく姿も見られます。ある子どもは人前に出るのが苦手で、毎年、行事への参加を嫌がっていました。ところが、行事の内容を子ども同士で決めるようにしたところ、生活発表会で行う演劇の役決めで、自ら効果音係を志願しました。本番では堂々と役割を果たして満足そうな表情を見せ、保護者もその姿に成長を感じていたといいます。こうした変化は、保育記録の充実だけが要因ではありませんが、保育者が子どもを見取り、それを記録し、記録を介して先輩からの助言を得て、次の援助を考え、実践することの繰り返しが生んだ成果といえます。

「子どもたちの明らかな変化を見て、先生方は自分たちの実践に自信を深めつつあります。今後も、保育の実態に合わせた記録の改善や、保育者の質の向上に努めながら、子ども主体の保育を深めていきます」（森田達郎先生）

月末の振り返り

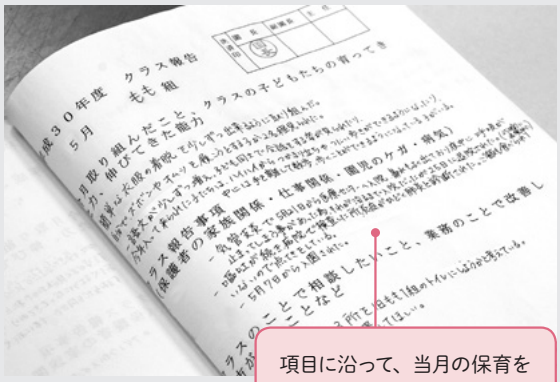


写真５

項目に沿って、当月の保育を振り返る。全クラス分の内容を全職員で共有することで、効率的に情報交換ができる。

幼児理解が深まった、あの頃、あの場面

夢中で遊びを生み出す姿を見て「子どもの力を信じていい」と心から思えた

さくら保育園　5歳児クラス担任　岡山和史（かずふみ）先生

子ども主体の保育へと転換した１年目は、頭では理解できても具体的な方法がわからず、戸惑いの連続でした。特に印象に残っているのは、当時担任をしていた３歳児の保育室にままごとコーナーを設置したときのことです。私の意図に反し、その場所で鍋やフライパンを太鼓やギターに見立てて遊ぶ子どもたちがいました。以前なら「ここはおままごとの場所だよ」と止めていたはずです。子どもの主体性を大切にするために、この場面では、どう声をかければよいのだろう――私にはまったくわかりませんでした。折しもその日は、保育参観日。保護者には何ともまとまりのない活動に見えたかもしれません。

反省会で園長や先輩の保育者に相談すると、「いっそのこと、楽器を作ってみたら？」とアドバイスされました。翌日、先行き不透明な活動に不安を抱きつつ、用意してきた楽器の写真を見せ、「食器はおままごとで使うから、ほかのもので自分の楽器を作ってみる？」と提案すると、大喜びする子どもの姿に少し勇気づけられました。

その後の展開は驚きの連続でした。まず、段ボールでギターを作り始めた子どもが１時間近く１人で製作に没頭する姿が衝撃的でした。３歳児でも本当にやりたい遊びならここまで集中できるのかと、それまでの見方が変わりました。さらに、太鼓を作った子どもは１つでは物足りず、音の異なる材料を組み合わせてドラムセットを作るなど、それぞれがリアリティーを追究していきました。３人ほどでスタートした遊びが、徐々にクラス全体へと広がり、楽器の演奏に合わせてダンスをしたいというグループも現れました。さらに、保育室の前を通りかかった５歳児も興味をもち、クラスを超えて活動が広がっていったのです。

こうして数か月間にわたって活動はどんどん発展し、生活発表会での演奏会でクライマックスを迎えます。その間に私がしたことは、さまざまな楽器の写真を用意してイメージを膨らませたり、子どものアイデアを形にする素材を用意したりと、あくまでも子どもが「こうしたい」という思いを実現する援助だけでした。「〇〇をしなさい」といった指示は一切していません。活動の過程を通して、「本当にやりたいことなら子ども自身で活動をつくれる」「保育者は子どもの力を信じ、後ろから支えればいい」と気づきました。「子ども主体の保育」とはこういうことかと、子どもたちから教えられた体験でした。

京都府・舞鶴市社会福祉法人倉梯福祉会
さくら保育園

◎「自分で考え、自分で行動し、自分で責任をとる力を育てる」保育をめざす。自然環境を生かした保育や造形活動などにも力を入れる。

園長　森田達郎先生
所在地　京都府舞鶴市七条中町 8-20
園児数　99人

データから見る
幼児教育

読み聞かせの実態と言葉の発達

──幼児期から小学生の家庭教育調査──

ベネッセ教育総合研究所では、幼児期から小学生の子どもをもつ母親を対象に、幼児期から児童期における家庭教育と子どもの育ちとの関連を捉えることを目的とした追跡調査を、2012 年より継続的に実施しています。今回は調査結果の中で、幼児期の読み聞かせと児童期の言語発達との関連について取り上げます。

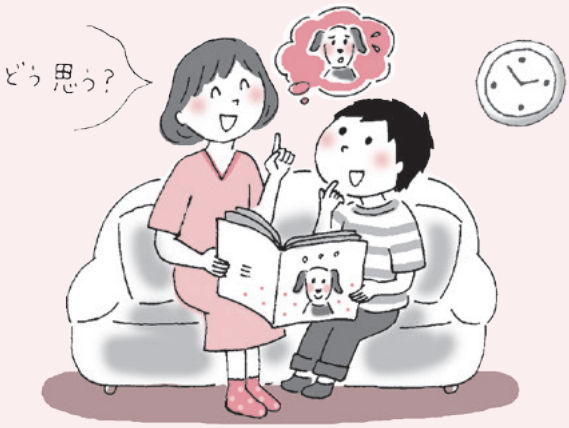
親子間での読書体験の共有が将来につながる言葉の力を育む

目白大学 人間学部 子ども学科 准教授
荒牧美佐子先生

あらまき・みさこ
専門分野は発達心理学。乳幼児をもつ母親の育児感情、園における子育て支援の効果検証、幼児期の家庭教育が子どもの発達に与える影響などについて研究を行う。本調査の監修者の１人。

今回の調査から、幼児期の読み聞かせ体験が豊かだった子どもほど、小学生になってからひとりで絵本や本を読む（見る）頻度が高い傾向にあることがわかりました（P21 3）。

読み聞かせは子どもにとって、言葉を耳で聞き、文字を目で追い、ときには子ども自身がお気に入りのセリフや擬音を口にするなど、言語を総合的に活用する場です。また、子どもは読み聞かせをしてもらいながら登場人物の心情を想像したり、絵本に描かれていない場面までも想像したりしています。読み聞かせの時間、物語の中に没入し、日常とは異なる世界を楽しみながら、子どもは視野を広げ、思考を豊かにしているのです。読み聞かせを通じて本を好きになり、本を読む力の素地が育まれていることが、子どもの読書習慣の確立につながっていると考えられます。



さらに忘れてはいけないのは、読み聞かせを通して、保護者などの大人と会話をしたり、読書体験を共有したりすることの大切さです。今回の調査では、読み聞かせの際に、保護者と本の感想を話し合ったり、内容を実際のできごとに結びつけて話し合ったりするような双方向の体験をじっくりと積むことが、小学生以降の児童期の論理性や言葉のスキルに影響することがわかっています（図）。書かれている内容を読むだけでなく、「次どうなると思う？」「どうしてこうなったのだと思う？」などと子どもの考えを聞いたり、「このあと、こうなったんじゃないかな」と保護者の考えを話したりすることで、子どもの論理性や言葉のスキルが育まれていくのです。

大人の言葉の力は子どもとは比較にならないほど豊かですから、読み聞かせをきっかけに家庭での会話の機会を増やすことで、子どもが保護者からも言葉の力を獲得し、絵本以外にも言葉の世界を広げていくことは容易に想像できます。

そのように考えると、読み聞かせは単に「文字を読

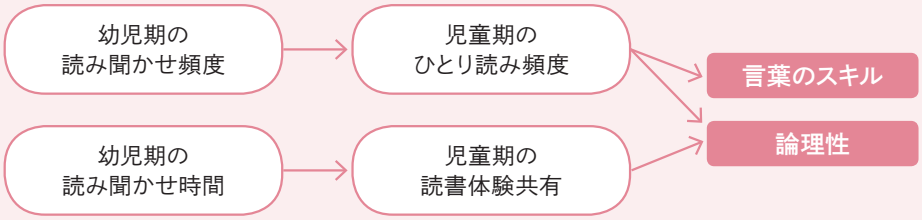
■「幼児期から小学生の家庭教育調査」の調査概要

調査対象：子どもが年少児から小学４年生までの縦断調査に7年間参加した母親 402 人
調査テーマ：幼児期から小学生の子どもの生活、学びの様子と保護者のかかわりや意識
調査時期：2012 年1月～2018 年3月（全７回）
調査地域：全国
調査方法：郵送法（自記式アンケートを郵送により配布・回収）
調査内容：学びに向かう力・生活習慣・学習準備等の実態／母親の養育態度・母親の関わりなど

引用･転載時のお願い　本調査の結果を引用･転載される際には、調査名称を記載してください。本調査の引用時の名称：ベネッセ教育総合研究所「幼児期の家庭教育調査」(2018)

詳しい調査結果はこちらからご覧になれます。▶https://berd.benesse.jp/ または　ベネッセ　家庭教育調査　検索

図　幼児期の読み聞かせと児童期の言語発達との関連



2つの言葉の力		
	言葉のスキル	筋道を考えて書いたり、漢字を正しく書いたり、段落を意識して書いたりできる力
	論理性	自分の言葉で順序立てて相手にわかるように話せたり、原因と結果のつながりを考えたりする力

＊「幼児期から小学生の家庭教育調査」の結果をもとに編集部で作成

本調査からわかったこと

- 幼児期の読み聞かせの頻度が高いほど、児童期のひとり読みの頻度が高まる。そして、児童期の中でも小学４年生以降のひとり読みの頻度の高さは、言葉のスキルや論理性の獲得に影響を与えている。
- 幼児期の読み聞かせで、内容について質問したり、子どもの質問に答えたりするという双方向のやり取りに時間をかけているほど、児童期にも本について保護者と話し合ったり、感想を述べ合ったりするという読書体験を共有する時間が長くなる。そして、児童期の読書体験の共有時間の長さは、論理性の獲得に影響を与えている。

めるようになる」ことを目標にしたものではなく、保護者との読書体験の共有を通じて、言葉を使って豊かなコミュニケーションをとったり、自分の考えを深めたりする場でもあるといえそうです。

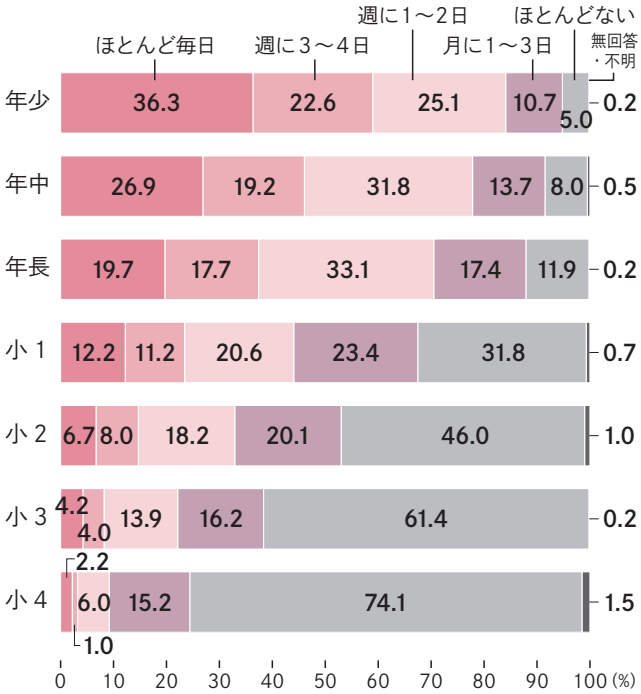
児童期になると、読み聞かせの頻度は減っていきます（P20 1）。文字を覚え、保護者のサポートがなくてもひとりで本を読めるようになると、「文字を読めるようになったのだからひとりで読んだ方がよい」と考える保護者が増えることなどが理由でしょう。ただ、文字を読めることと、書かれている内容を理解することとは違います。早い時期からひとりで読んでいても、それだけで言葉の力が高まるわけではないのです。

重要なのは、ひとり読みをするかどうかよりも、本の内容を味わったり、書かれていることを実際のできごとに結びつけて考えたりすることです。そうした子どもの読書体験を支える上で、幼児期から小学校低学年での読み聞かせが役に立つでしょう。ひとり読みに慣れた子どもについても、保護者が読み聞かせを行うことで子どもの読書体験の伴走者となり、豊かな読書習慣の確立につながっていくと考えています。

先生方へ　言葉の力を伸ばそうとするあまり、「毎日10分続ける」などと読み聞かせが義務になってしまうと保護者には負担となり、子どもにとっても楽しい時間になりません。「読んで！」と子どもが言ってきたときに可能な範囲で読んであげればよいですし、保護者も、自分の時間に余裕があるときに「絵本読もうか？」と声をかければよいのではないでしょうか。そして、子どもが絵本の世界にのめり込み、保護者も読み聞かせを楽しめるときは時間を気にせず、たっぷりと読んであげればよいでしょう。読み聞かせは、子どもも大人も楽しむことが大切だということを、先生からも保護者に伝えていただきたいと思います。

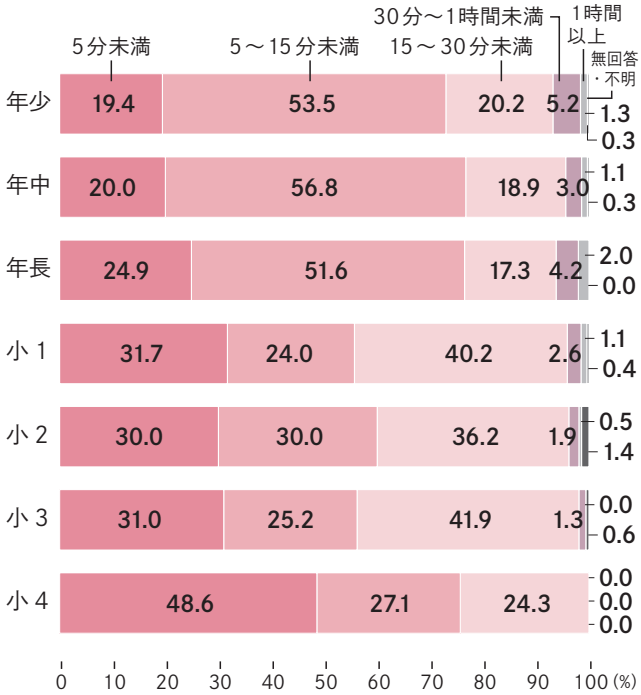
1 絵本や本の読み聞かせ頻度

読み聞かせの頻度は、学年とともに低くなる



2 絵本や本の読み聞かせ時間（1日）

幼児期の読み聞かせは多くの家庭で1日5分以上



※読み聞かせが「ほとんどない」を除く。

絵本や本の読み聞かせの時間と頻度について、学年別で比較しました。読み聞かせの頻度については、「週に3～4日」以上の家庭が年少児で約6割、年中児で5割近くとなりました（1）。また、読み聞かせの時間については、年少児・年中児をもつ家庭で、1日に5分以上の読み聞かせをしている割合がおよそ8割でした（2）。

一般に、子どもの学年が上がるにつれて、読み聞かせの頻度や時間は減少する傾向にあります。例えば読み聞かせの頻度では、保護者が週に1日以上読み聞かせをする割合は、年長児では約7割ですが、小学1年生で4割強、小学2年生で約3割、小学4年生では約1割と徐々に減少していきます。子どもがひとりで文字を読めるようになっていくにつれて、その様子を見て、読み聞かせの機会を減らしていく保護者が多いのではないかと思われます。

また、1日の読み聞かせ時間のグラフ（2）では、小学校入学以降に「15～30分未満」の層が増加しています。このグラフは読み聞かせをしている保護者のみが対象であるため、小学1～3年生で読み聞かせを続けている保護者は、4割前後が1日15～30分未満の読み聞かせをしていることを示しています。全体の傾向としては、小学1年生以降に読み聞かせをする割合は減少していることから、熱心な保護者であることが推測されます。また、小学生になり絵本から幼年童話などへ、読み聞かせをする内容に広がりが出てきていることも考えられます。

荒牧先生から

子どもが成長するにつれ、読み聞かせの頻度や時間が少なくなるのは当然のことかもしれません。ただ、子どもの読書体験を豊かにするために園ができることはたくさんあります。例えば、複数の子どもたちへの読み聞かせで活発なやり取りを楽しむことや、家庭では用意することが難しいさまざまな絵本をそろえることなどは、読書への興味を高めるきっかけになるはずです。

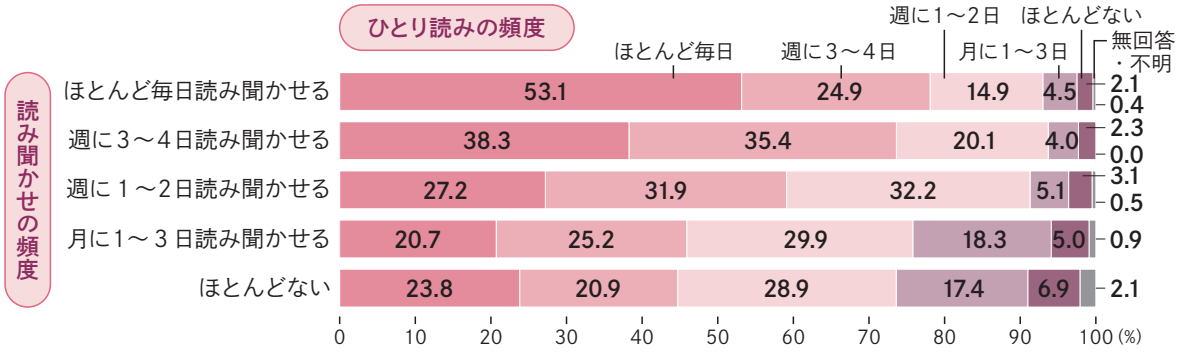
データ解説・本調査の担当

ベネッセ教育総合研究所次世代育成研究室 室長／主席研究員
高岡純子 たかおか・じゅんこ

乳幼児領域を中心に子ども、保護者、園を対象とした意識や実態の調査研究、乳幼児とメディアの研究などを担当。文部科学省・幼児教育に関する調査研究拠点の整備に向けた検討会議委員（2015年度）、三重県・家庭教育の充実に向けた検討委員会委員（2016年度）などを務める。

3 読み聞かせの頻度とひとり読みの頻度との関連

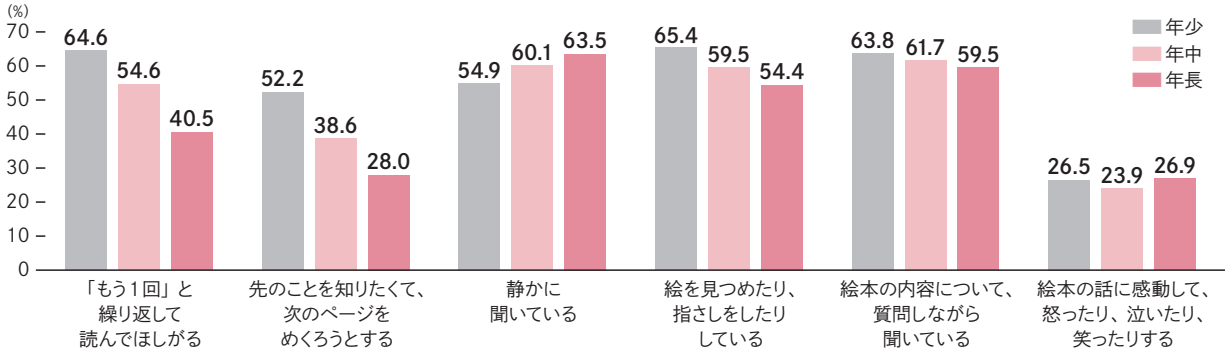
読み聞かせの頻度が高いほど、ひとり読みの頻度も高くなる



※「読み聞かせの頻度」は年長児、「ひとり読みの頻度」は小学1年生。

4 読み聞かせをしているときの子どもの様子

読み聞かせを通して、子どもは保護者とのやり取りを楽しむ



※1 グラフの数値は、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。　※2 複数回答。

保護者が子どもに読み聞かせをする頻度は、子どもの学年が上がるにつれ減少していきます。そこで、年長児から小学1年生にかけてのひとり読みの様子について見てみると、子どもが年長児のときに読み聞かせを「ほとんど毎日」していた場合、小学1年生になった子どもがひとりで絵本や本を読む（見る）頻度は「ほとんど毎日」が5割を超えました(3)。読み聞かせの頻度が「週に3～4日」「週に1～2日」と減るほど、小学1年生での子どものひとり読みの頻度も減っており、保護者の読み聞かせが、子どもの絵本や本への関心を高め、ひとり読みの習慣につながっていくことがうかがえます。

4のグラフは、読み聞かせをしているときの子どもの様子について聞いたものです。学年が上がるとともに「『もう1回』と繰り返して読んでほしがる」「先のことを知りたくて、次のページをめくろうとする」様子は徐々に減り、「静かに聞いている」態度が増えていきます。また、5～6割の子どもが「絵を見つめたり、指さしをしたり」し、6割前後は「絵本の内容について、質問しながら」聞いています。多くの子どもが、保護者とのやり取りを楽しんでいる様子がうかがえます。このようなやり取りの時間を通して、想像する力や思考する力の土台が育まれていきます。園の先生方が、そうした幼児期の読み聞かせの意味について、保護者に伝えていくことも重要になるでしょう。

荒牧先生から

子どもはお気に入りの絵本を繰り返し読んでもらいたがるものです。それは、大好きな場面やセリフから登場人物の気持ちや考えをイメージすることで、思考を深めたり、言葉のリズムの心地よさを味わったりするのが楽しいからでしょう。言葉のスキルの獲得を重視するあまり、保護者はいろいろな絵本を与えたくなるかもしれません。お気に入りの1冊にのめり込む意味を、保護者にも理解してもらいたいですね。

2019年4月8日発行 編集発行人 岡田晴奈 発行所 (株)ベネッセコーポレーション
©Benesse Corporation 2019

表紙／裏表紙

東京学芸大学附属幼稚園 小金井園舎

◎継続的な記録を通して一人ひとりの子どもの姿、育ちを丁寧に捉えている東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎では、遊びや体験を言語化して次の保育につなげるために、毎日の記録として「保育マップ型記録」を運用しています。

刊行に寄せて　ベネッセは、日本の幼児教育・保育環境の充実を目指し、幼児教育・保育を担うかたに向けて、「保育の質」の向上に役立つ情報をお届けします。幅広い学問領域の研究や調査データをもとに、先生がたの思いに寄り添いながら、よりよい子どもの育ちについてともに考えていきます。

「これからの幼児教育」ウェブサイトでは

すべての記事を無料でダウンロードできます

◎過去3回の特集テーマ

2018年 秋号 語り合いを通して深める幼児理解

2018年 春号 『遊び』の大切さを保護者にいかに伝えるか

2017年 秋号 新要領・指針を生かす！ 次年度計画の検討ステップ

※最新号、バックナンバー等の追加発送は行っておりません。

※画像はイメージです。

https://berd.benesse.jp/magazine/en/backnumber/ または ベネッセ　これからの幼児教育 で 検索

◎お問い合わせ先／「これからの幼児教育」お問い合わせ窓口　〒700-8686 岡山市北区南方 3-7-17
0120-926-610（通話料無料）　受付時間：9:00 ～ 18:00（土日・祝日・年末年始除く）
※番号をよくお確かめのうえ、おかけください。 ※上記番号に接続できない通信機器・回線の場合は、086-214-6301 へおかけください（ただし通話料がかかります）。

8PL056-2